

# 山椒大夫

## 映画文学人生論

原作：森鷗外 (1915) 「中央公論」

監督：溝口健二 (1954)

脚色：八尋不二 依田義賢

出演：玉木 田中絹代  
厨子王 花柳喜代  
安寿 香川京子  
山椒大夫 進藤英太郎

撮影：宮川一夫  
音楽：早坂文雄

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群（ひとむれ）が歩いている

森鷗外は夏目漱石とともに近代日本文学を代表する文豪で、代表作は『雁』『高瀬舟』『阿部一族』『渋江抽斎』などだが、これらの作品を読んだことがあるという人はあまりいない。

年少の読者をふくめていちばんなじみのある作品は『山椒大夫』だと思う。安寿と厨子王の姉弟が人買いにさらわれて、母親と生き別れになるという可哀想な話だ。

もともと、鷗外作『山椒大夫』を読んだ人がどれほどいるだろうか。私も話の筋は子ども頃か知ら知っているが、読んだのは今回がはじめてだ。

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群（ひとむれ）が歩いている。母は三十歳を踰（こ）えたばかりの女で、二人の子供を連れている。姉は十四、弟は十二である。

これは遠い昔の伝説だが、一九七十年代の越後でも人々が何者かによって拉致（らち）されて姿を消す事件が続発し、人買いの記憶がよみがえってきたことがある。この世はどこかに誰かの悪意がひそんでいるおそろしいところだ、昔も今も。

姉の名前は安寿（あんじゅ）、弟の名前は厨子王（ずしおう）といった。人買いの舟によって母は佐渡に連れ去られ、姉弟は丹後の山椒大夫に売



## 山椒大夫 —— 映画文学人生論

られた。

佐渡に渡った母は粟の鳥を逐わされる。山椒大夫伝説として伝えられている一節だが、その話に鷗外が関心を抱いた。晩年の鷗外は史料を調べて見てその中に窺（うかが）われる「自然」を尊重する歴史其儘の書き方をした。しかし、不満がなくもない。歴史離れがしたさに山椒大夫を書いてみたが、さて書き上げた所を見れば、なんだか歴史離れが足りないようだと言っている。

溝口健二監督の映画を鑑賞し、鷗外の小説と比較してみた。安寿が姉ではなく、妹になっているが、自分の身を犠牲にして厨子王の逃亡を助けるところは原作通り。大きな違いは、映画では丹後の国守に任じられた厨子王が着任後直ちに人身売買を禁じて、山椒大夫の財産を没収し、丹後から追放したことだ。

「人は慈悲の心を持たなければ人ではない」という父の教えを守る厨子王が山椒大夫を罰する勸善懲悪の話となっているが、原作は違う。国守は最初の政（まつりごと）として、丹後一国で人の売り買いを禁じた。山椒大夫もことごとく奴婢を解放して給料を払うことにした。大夫の家では一時それを大きい損失のように思ったが、この時から農作も工匠の業も前にも増して盛んになり、一族はいよいよ富み栄えたという。

山椒魚一族ますます富み栄え